

『コヘルトの言葉』の構造と思想

——一人称表現の用法をめぐって——

金 井 由 嗣

(一) 文体と構造をめぐる問題

『コヘルトの言葉』の文学構造については、近年幾人も研究者によって解明の試みがなされてきたが、未だ決定的な結論は得られていない。とはいえ、本書に特徴的な文体の考察を出発点として構造の問題に取り組むための優れた研究もなされており、それらの成果を基にしてより包括的な研究がなされる段階にあると言つて良い。

キー・ワードまたはキー・フレーズの用法による構造分析に方法的に取り組んだのは、Hertzberg (1963)、Wright (1968) に始まる。これらは、それ以前の多くの研究が思想的な用語の研究に集中していたのに対して、思想の枠組みを提供する表現形式を問題にした点で重要な業績だったと言える。特に、同じ用語が繰り返し使用されていることを本書に顕著な特徴として指摘し、その繰り返しによって構造を分析することを提唱した Wright の貢献は大きい。

Wright の構造分析に対しては、Crenshaw (1986)、Fox (1989)

『コヘルトの言葉』の構造と思想 (金井)

による決定的な批判がなされている。批判の要点は、Wright の方法が、本来意図されていたほど客観的・形式的なものではなく、思想内容から見た修正を加えてはじめて成り立っているという点である。ここでなされていたような、明快な文学的定式による分析はもはや不可能と見なされねばならない。

Crenshaw は、Wright の結論を批判する一方、用語の繰り返しによる構造分析という彼の提案を高く評価し、頻出する用語の検討による思想研究の有効性を示唆している。Crenshaw 自身はこの方法を十分に展開しておらず、また彼は構造の問題にはさして興味を示さなかったが、基本的に同じ方法による研究が Fox によってなされた。Fox の方法論は、本書に見られる矛盾はあえて解釈しようとせず、個々の概念の思想的連関をまず解明するというものであり、堅実な道であるといえる。彼はこの方法によって一定の成果をあげたが、本書全体の連関を取り戻すには至っていない。彼の研究は綿密で行き届いたものであるが、本書の中心的概念 (と Fox が認めるもの) の解明に限定されており、本書の用語連関全体を問題にするものではない。また、類義語の言い替えについても、語義の面から参照されるだけであり、言い替えによる思想の広がりについては十分な注意が払われていない。その反面、そこで取り上げられた中心的な術語については、彼の分析は信頼の置けるものである。

形式的区分のみによって本書を構造化する Wright の意欲的研究が十分な成果を上げなかったことから、本書が単純な直線的

構造によって説明されるのは困難であることが明らかになった。本書はむしろ、強調される内容に応じたいくつかの相(アスペクト)の複合による有機的構造を持つものとして理解されるべきと適切である。

本書においては、探究と観察に関する一人称表現の使用が顕著であり、全体の表現上の基調をなしている。この研究では、これらの一人称表現の用法を検討することによって本書全体の構造を説明することを試みる。これにより、著者が自らの到達した「知恵」「結論」の内容と射程をどのように理解し、また如何にしてその中に様々な「知識」を位置づけていたかが明らかにされると考えるからである。これらの一人称表現は一・二章では頻繁に用いられ、三・四章ではやや少なく、五章以下では著者が自分の考察を振り返る文脈に限定して使用される。本論文においては一章一三以下を著者自身による総括として取り上げ、ここで用いられた用語や表現の度重なる使用が本書の文体と思想表現に及ぼしている効果について考察する。

(二) 一・二—一八における探究の総括

1. 「心」(Ihbi)の用法

コヘレトは本書の冒頭で印象的な詩文を記した後、「エルサレムで王であった」自分を紹介し、彼の行った知恵の探究を「天の下でなされるすべてのわざについて調べること (dabar)」と追

い求めること (yiqq) を我が心に(課題として)与えた」と述べている。この箇所特徴的なことは、「心」(Ihbi)の位置づけである。コヘレトは「心」(Ihbi)「探究を与え」「心と共に」(Im-Ihbi)「自分が多くを達成した事を宣言し」「心の内に (b'Ihbi)」具体的な探究を方向付ける。二・四—九において快楽や財産の獲得に関係づけられた「私」(E)の用法と比較すれば、ここでの「心」は知恵・知識の座と見なされており、情緒の表現ではないことは明らかである。

探究の主体が単なる「自己」ではなく、「我が心」として対象化されることは、探究の対象が「すべて (of the)」とされている事と併せて、彼の考察に客観的反省の相を付与することに役立つ。それゆえ、一・一三「我が心にく与えた」は、本書の構成上特に重要な箇所である。コヘレトは「すべて」についての探究を、知恵の座である「心」に課した。そしてそれは、神が「人の子らに」与えた、普遍的な探求心の結果であったとされる。彼はまた一・一七で自己の探究の成果を総括し、「かくして (E)。私は、ちえの知識及び狂気と愚かさの知識をわが心に与えた」と語り、その知識の空しさを格言の引用で印象づけている。従って一・二—一八は本書における知的探究の方向性を示す箇所として位置づけられ、その探究の全体は著者が自らの「心」に与えた課題として記述されている。

2. 「すべて」「つとめ」「わざ」の用法

この箇所においてはまた、「すべての」(ko) という表現が際立っている。この言葉は、「行へ、わざ (asah, ma'aseh)」¹「つとめ (in'yan)」²「事柄 (言葉) (dabar)」という用語と関係づけられている。同様に普遍性を表現する用語として、「天の下 (yahath-hassanyim)」³「太陽の下 (yahath-hassames)」⁴や「人の子ら (bete-ha'adam)」⁵がある。コヘレトは「天の下でなされるすべて」についての探究を自らの課題としたが、それは「神が人の子らに与えたつらいつとめ」であった。彼は「太陽の下でなされるすべてのわざ」を「見た」が、「すべては風を追うようなもの」だった。また彼は「私の前にエルサレムにいたすべての者にまさって」⁶知恵と知識とを獲得したと自覚し、自らの得た知恵(および「狂気と愚かさ」)の「知識」を心に与えた。これは自らの獲得した知恵の客観化による反省を示している。コヘレトが用いるこれらの独特な用語は、彼の考察が特定の宗教的伝統や文化的背景に限定されない普遍性を目指したものであることをしめしている。

3. 探究と観察を表す一人称表現

「私は見た (ra'iti)」⁷「私は知った (yata'iti)」⁸「私は言った (amarti, dibharti)」⁹「私はくに向かった (arta)」などの一人称の表現がコヘレトの探究を特徴づけている。ここではコヘレトがこれらの表現を、同一の、または一連の探究を記述する中で言い替えて使用していることに注目しておきたい。一・

二——一八で一度づつ用いられているこれらの語は、本書においてリアルな生の観察を記述する際の導入句として繰り返し使用されている。

また、これらの表現は二・一「私は心の内に言った」を介して二章における快樂や財産の追求と直接つながっているにも注目したい。コヘレトにとつて快樂の追求と知恵の追求は表裏一体のものであったことが一連の一人称表現に示されている。しかもなお彼が「知恵」を見失わなかったのは、二・三「そして我が心は知恵に聞き……」にも示されているように、知恵の座としての「心」が彼自身とその体験に対する批判的視点を保持していたからである。現実には体験することから「知識」を獲得しようとする姿勢は「天の下で」¹⁰実際になされるわざを専ら対象とする彼のリアリズムの現れであり、「知恵」を保った「心」による反省は体験によつて得られたものを相対化する客観的視座の保証であった。

体験のリアリティはそこから得られた洞察に説得力を与えるが、それが個人の体験にとどまる限り、他者にそのまま当てはめることは出来ない。コヘレトは一方では探究の出発点を神から普遍的に与えられた探求心(「つとめ」)に置くことにより、他方では自分の探究を常に批判的に反省して客観的法則(「すべては空しい」)を導くことによつて、彼の得た「知識」を普遍的に通用する「知恵」として提示する根拠を得たのである。

(三) 反復使用に見る構造

1. 「つとめ」に関する再考察(三・一〇一七)

ここでは、この両者の文脈をつなぐものとして一・一二と三・一〇に見られる「神が人の子らに与えたつとめ」に注目したい。つとめ(*ḥyṯ*)は本書においては「労苦(*ḥyṯ*)」との関連で用いられ、しばしば「神のわざ」と関連づけられているが、特に三・一〇においては冠詞を添えて言及される(「神が人の子らに与えた、かのつとめ」。この表現が一・一二(「これは神が人の子らに与えたつらいつとめだ」と並行関係にあることは明白である。それゆえ、この箇所はコヘレトが本書の冒頭に述べた探究の主題についての新しい視点を導入する役割を果たしていることがわかる。先には「天の下でなされるすべてのわざ」を調べ探るといふ彼の探究が「つらいつとめ」と言われたのであるが、ここでは「つとめ」そのものが観察の対象とされる。神は「すべてを」時に相応しく「なし(造り)、また「彼ら(人の心に)「永遠(*olam*)」を与えた。これが「つとめ」の内容であつて、それはすなわち、人には「神がなすわざ」を「始めから終わりまで」見極めることは出来ない、ということである。「すべて」に関わる探究を「心」に与えるのは探究者(この場合はコヘレト)自身であつたが、それは同時に「神が人の子らに与えた「つとめ(永遠)」であつた。コヘレトはこの事実を「見、

神の「わざ」が人間の知を超えたものであることを「知つた」。それ故、人間の知は根元的に限定されたもの、「神への恐れ」を超え得ないものである。

2. 「我が心に与えた」による枠構造

(二) 1.においてとりあげた「わが心に与えた」という表現は、八・九、一六、九・一において再び現われている。「太陽の下でなされるすべてのわざ」(八・九)、「知恵の知識」、「地上でなされるつとめ(*ḥyṯ*)」(以上八・一六)といった言葉は一・一二以下の課題を再び全面に提示し、「これらすべてを(*et omnia*)」(八・九、九・一)、「このようにして(*et sic*)」(八・一六)という表現はこの箇所に至るまでのコヘレトの観察・洞察がここで総括されていることを示している。

また八・一一―九・一における「神のわざ」・「神(へ)の恐れ」と、それらと「正義」との関係への言及は三・一〇―一七の主題を反映している。

一・二二―一八との用語の関連は、八・九―一七において特に明確である。それゆえ、この箇所は一・二二―一八との間に一種の枠構造を形成していると思ふことができる。ただし、三章に対応する「神のわざ」に関する知見が加えられている点で単純な枠構造とは異なる。ここでは、先に提示された「すべてのわざ」に関する二つの視点(「太陽の下でなされるわざ」と「神がなしたわざ」)が統合され、全体としての著者の洞察が縮

めくられていた。

九・一はここで述べた枠には入り切らない要素を含んでいる。ここは内容的には二・二二―二七、一八―二六に対応して別の枠を形成しているが、あとに続く文脈との結び付きも顕著である(二つの「これらすべて」・*et-kol-ze*と*et-kol-ze aser*)。この箇所だけが「わが心へと」(*al-libbi*)という、他には見られない表現を用いていることにも注意が必要である。それゆえ、八・二二―一八、九・一―三はそれ以前の文脈(知恵の探究と考察)との関連で二つの微妙にずれた枠構造を形成しつつ、以後の記述(格言に基づいた「勧め」)に開かれた接点を提供していると考えられる。

3. 「私は見た」「私は知った」「私は言った」など

これらの一人称表現は、本書のほぼ全体にわたって使用されている。著者が好んで用いるのは「私は見た」という表現であるが、その用法は置かれた文脈によって異なっており、探究のある局面を示す、単なる観察事実を記述する、著者による価値判断を示す、の三通りに分類できる。「私は言った」(*amarti, dibarti*)も同様であるが、探究の導入として用いられるのは「心の内に」(*ofinbi*)を伴う場合に限られる。「私は知った」は価値判断を示す用法に限定されており、常に「空しさ」「風を追う」「知り得ない」といった知に対する否定的結論を導いている。

これらの表現が集散的に使用されて文脈を特徴づけているのは七・一五―二九である。コヘレトはここで「私はすべてを見た」と語り、「すべてを知恵に於いて試みた」「知者になろうと言った」と述べている。ここでは一五節において「義」(*sedeq*)と悪(*tesa*)が主題として導入され、それらと「知恵」との関連が専ら問題になっている。この箇所は、もちろん他の箇所(例えば二・一八―二六)との関連はあるにしても、それ自体で完結した一単位をなしており、ここでの彼の考察は個人的経験の範囲を超えてはいない、すなわち普遍化されていない。ここでの個人的考察が八章で「王と神」のカテゴリ、また「太陽の下の人間」という舞台設定を与えられることで普遍性を獲得し、「知恵の知識」(八・一六)に通ずるようになるのである。これらの一人称表現は本書の全体としての統一性と内的関連を印象づけるものではあるが、それだけで主題を包括するものではなく、かえって他の用語との関連がこれらの表現の個々の用法を判定する材料になることが分かる。

(四) 本書の構理解と一人称表現の用法

コヘレトは自らの知的探究を記述するにあたって、一人称の表現を好んで使用する。このことは実際に体験した、あるいは体験可能な現実の生をもつばら洞察の対象とする彼のリアリズムの現れと見なすことが出来る。しかし、個人的な体験はそれ

自体では「知恵」にとって本来的な普遍性の要求を満たすことが出来ない。コヘレトは、洞察の範囲を地上世界(全体) (天の下、太陽の下) に起る「すべて」とその中に生きる「人の子ら」として設定し、さらに実際の体験を批判的に洞察してそこから教訓を引き出す批判的視座(「心」)を設定することによって、個人的な体験から得られた洞察を普遍的な「知恵」にまで昇華したのである。

また一人称表現を中心としたコヘレトの特徴的な用語法は本書において一貫しているが、彼はそれらを十分な自覚を持って使用しており、それらの用語・語法の検討によって本書の構造を明らかにする可能性があることが分かった。

本書の構造は単純な直線的なものではなく、いくつかの「枠構造」の複合として理解できる可能性のあることも明らかにした。さらに研究を進めるためには、より小さな範囲での枠構造や並行構造の検討と共に、明らかかな枠には入りきらない部分の扱いを確立することが必要であると予想される。このことは特に、著者による様々な格言の引用や実際の勧めの部分について当てはまる問題である。今後の課題としておきたい。

註

(1) 構造の解明が問題とされるためには、本書の基本部分について何らかの統一性が認められることが前提されなければ

はならぬ。それについては Murphy, R. E., *Ecclesiastes, Word Biblical Commentary* 23A, Dallas, Word Books, 1992, pp. xxxiii-xxxiv 参照。

(2) Hertzberg, H. W., *Der Prediger, Kommentar zum Alten Testament* n.s., xvii, 4, Gütersloh, Mohr, 1963; Wright, A. G., 'The riddle of the sphinx: the structure of the Book of Qoheleth', *Catholic Biblical Quarterly* 30 (1968): 313-334; 'The riddle of the sphinx revisited: numerical patterns in the Book of Qoheleth', *CBQ* 42 (1980): 38-51; 'Additional numerical patterns in Qoheleth', *CBQ* 45 (1983): 32-43.

(3) Crenshaw, J. L., *Ecclesiastes, Old Testament Library*, London, SCM Press, 1988, pp. 40-42; Fox, M. V., *Qohelet and his Contradictions, Bible and Literature* 71, Sheffield, Almond Press, 1989, pp. 155-157.

(4) Fox, *ibid.*, pp. 151 ff.

(5) この言葉から始まる単元の長さや全体の中での位置づけに関しては研究者の間で意見の相違が見られるが、これが本書全体の主題に関係した導入句であることにはほぼ同意が見られる。Murphy, *ibid.*, p. 11 参照。

(6) 太陽 (sense) は、アッカド語と共通の語根であり、古代メソポタミアでは人間を保護し、時に裁く神として描かれている。特に、ギルガメシュ叙事詩における太陽神シヤマシユとの関連は注目に値する。

「だが、わが友よ、天〔上〕まで上ることが出来ようか。太陽（シヤマシユ）のもとに永遠に〔生きるは〕神々のみ、人間というものは、その（生きる）日数に限りがある。彼らのなす事は、すべて風にすぎない。」

〔ギルガメシュ叙事詩〕、「古代オリエント集」
筑摩世界文学大系1、一九七八、一四五頁

(7) 「人の子」、「人の子ら」は旧約で多く用いられる基本的な用語であるが、ここでは「人 (adam)」に冠詞が付いた形が用いられている。これは本書以外では旧約中に四例しか見られない、やや特殊な用法である (Gen 11:5, 1 Kgs 8:39, Ps 33:13, 145:12)。これらの箇所に見られる思想や表現とコヘレトとの親近性は注目し値する。

(8) ここでの三通りの「すべて」のうち、最後のものは内容が大きく異なっているにも関わらず、同じ表現 (p. kol-^{pa} goi) が用いられ、主題の一貫性を読み手に印象づけている。

(9) この箇所以外では、「わが心に与えた (nataati et-libbi)」ものは不定詞で表される探究の行為や知識であったが、ここでは「これらすべてを (p. kol-^{pa} goi) と与えた」となっており、個々の探究行為ではなく、結果の洞察をも含めた探究の全体を心に与えたことが述べられている。そのため、対格（直接目的語）を表す p. に対して、与格（間接目的語）を表す p. が p. に用いられたのである。探究そのものが

心に関係づけられていることから、この箇所は一・一二以下の文脈を反映していることがわかる。